

# 「同性愛」と“同性恋”の成立と定着

## —近代の日中語彙交流を視点に—

The Formation and Establishment of the Terms  
“Dōseiai” and “Tongxing lian” : From the Perspective of Vocabulary Exchange  
in Modern Japan and China

清地 ゆき子  
KIYOCHI Yukiko

### Abstract

This paper aims to demonstrate how the Japanese term “dōseiai” and contemporary Chinese term “tongxing lian” were established and to explore from the viewpoint of vocabulary exchange between the two languages the possible factors that contributed to the establishment of each term. The conclusion consists of the following 4 points:

- (1) The Japanese language, owing to the translation of specialized books on sexology from the West from the end of the Meiji Period until the beginning of the Taishō Period, witnessed the usage of words such as “dōsei no ai”, “dōseiren'ai” and “dōseiai” as translations of the terms Homosexuality or Homosexualität. However, these translations started to converge on “douseiai” by the latter half of the 1910s.
- (2) The Chinese language, owing to the translation of Japanese literature in the first half of the 1920s, was introduced to the terms “tongxing lianai” and “tongxing ai”. However, the word “tongxing lianai” was used more often by around the 1980s.
- (3) However, the usage of “tongxing lian” is also evident from the 1920s in the research papers of the prominent sociologist Pan Guangdan. Eventually, the latter half of the 1980s evidenced the convergence of most of the similar terms into “tongxing lian”.
- (4) The main factor for the establishment of “dōseiai” in Japanese and “tongxing lian” in Chinese is considered to be the word-formation power of the kanji characters “ai” and “lian” in Japanese and Chinese respectively.

## I はじめに

近代の日中語彙交流により、日中同形語が誕生する最大の要因について、陳（2001）は、「前期では漢訳洋書や英華字典など中国から日本へ流出が主流となっているが、後期では日本から中国へと流れていく」（陳 2001：355）とする<sup>1</sup>。この日中同形語については、既に数々の研究がみられる。しかし、中には拙稿（2010）で指摘した、「三角関係」と“三角恋愛”のように構成語の一部を変えて中国語に定着したものもあり、このような語彙を考察することは、両国の社会的背景の相違、或いは両言語の言語上の特性が浮き彫りにされるのではないかと推測される<sup>2</sup>。

本稿で取りあげる日本語の「同性愛」も近代訳語として成立し、中国語にも借用されたと思われるが、現代中国語の規範とされる《現代漢語詞典》には、“同性恋”が収録されており、現代中国語としては定着しなかったようである<sup>3</sup>。

ところで、日本語の所謂同性愛を表す訳語については、古川（1995）に詳しい考察がみられる。古川（1995）は19世紀末から20世紀初めにかけて考案された数種の訳語を明らかにした上で、それらを「同種交接・同性的色情・同性性欲・同性欲」などの「同性（間）色情・情欲・性欲」のグループと「同性の愛・同性の恋・同性恋愛・同性愛」などの「同性（の）愛・恋」のグループに分類している。但し、「同性愛」という言葉の成立については言及されていない<sup>4</sup>。また、黒岩（2008）は、古川（1995）の分類を受け、「同性（の）愛・恋」のグループの中の「同性愛」が他の語を凌駕した背景には、女性同士の心中事件（1911.7.26）を機に女性の「同性愛」についての議論が噴出したことにあるとしている。しかし、何故「同性恋」や「同性恋愛」に定着しなかったのかという疑問が残る。

一方、中国語の“同性恋”の成立や定着に関する先行研究は見られないものの、“恋”によって構成される語については、「清末になっても中国語の「恋」という漢字は恋を表現する固定用語にはならなかった」（張競 1993：8）という指摘がある。また、1910年代末から20年代には、“失

1 陳（2001）の示す「前期」とは宣教師らにより、数多くの英華字典が編まれた16世紀後半から19世紀末まで、「後期」とは中国人留学生による日本書物の翻訳が盛んに行われた1902年以降である。

2 拙稿（2010）では、日本で訳出された「三角関係」が、中国語では“三角恋愛”として定着したのは、所謂三角関係に対する捉え方に日本と中国で温度差があり、中国においては、たとえ三角関係になったとしても、恋愛をすること自体の重要性が叫ばれた背景があったことを指摘した。

尚、本稿では、特に日本語と中国語の区別が必要な場合、日本語は「」、中国語は“ ”とし、日本で出版された文献は『』、論文は「」を用い、中国で出版された文献は《》、論文は〈〉を用いた。

3 《現代漢語詞典》（商務印書館）には、1996年の第3版以降、2012年の第6版まで、“同性恋”が録されている。また、《応用漢語詞典》（商務印書館、2008）や《現代漢語規範詞典》（第2版、語文出版社、2010）においても“同性恋”が収録されている。

4 古川（1995）は、1922年の『変態性欲要説』（田中香涯）での「同性愛」の訳出をあげるものの、「同性の愛」というふたつの言葉の組み合わせではなく、ひとつの言葉としての同性愛が誰によって考察されたのかは、いまだ説明されていない」（古川1995：206）としている。

恋”や“恋人”のような2字語が日本語から借用され、1940年代には“異性恋”というような言葉も訳出されており、民国期以降、“恋”により構成される新語が創出された可能性も考えられる<sup>5</sup>。

本稿では、このような先行研究を踏まえながら、先ず、日本語において「同性愛」という言葉がどのように成立したのかを確認した上で、日本で訳出された訳語の中国語への借用、及び中国語での“同性恋”の成立・定着の過程を明らかにしたい。さらに、このような構成語が生じた要因を探ることにより、言語接触により垣間見られた、言語上の特性を考えてみたい。

## II 日本語における「同性愛」の成立と定着

### 1 「同性の愛」・「同性の恋」・「同性愛」の混用

「性」に関する科学的学問分野が欧米に登場したのは、18世紀半ばから19世紀後半で、その一つにはドイツ人医師・Krafft-Ebing (1840-1902) 著の *Psychopathia Sexualis* (1886) があるとされる(斎藤 2000: 1)。同書が出版された1880年代半ば、ドイツに留学していた森鷗外は同書を手し<sup>6</sup>、帰国後の1889年には「外情の事を録す」(筆名、台麓学人)を発表している。この中では、所謂女性の「同性愛」を描いた西洋の小説名を紹介する際に「西洋の小説には二女相愛するの事実を挙ぐるもの枚挙するに遑あらず<sup>7</sup>」と、「二女相愛する」という言葉が用いられている。また、1894年に *Psychopathia Sexualis* (第4版) が日本法医学会により、『色情狂篇』(春陽堂)と題して抄訳された際には、「ウリニング」の項で、所謂男性の「同性愛」が「同性の変愛」という訳語で表されている<sup>8</sup>。

1909年の鷗外の小説「キタ・セクスアリス」では、所謂男性の「同性愛」はUrningという英語で表され、1911年の小説「青年」では、フランス語のhomosexuelと「同性の愛」という言葉で表現されている<sup>9</sup>。この中で、鷗外が「同性の愛ということが頭に浮かんだ」と言うのは、homosexuelの訳語として「同性の愛」を考えたとと思われる<sup>10</sup>。

5 “失恋”と“恋人”の中国語での借用については、拙稿(2009・2011)で論じた。また“異性恋”は、1946年の潘光旦訳註《性心理学》(商務印書館)に heterosexuality の訳語にあてられている。

6 森鷗外(1862-1922)は1884年から4年間ドイツに留学し、1887年にベルリンで *Psychopathia Sexualis* を購入している(斎藤 2006: 3)。

7 台麓学人(鷗外) .1889.「外情の事を録す」『裁判医学会雑誌』第2号、5月、7-10ページ。

8 日本法医学会訳述 .1894.『色情狂篇』春陽堂、156ページ。尚、「色情狂編」は、1891年の『裁判医学雑誌』に連載されたのが日本での初めての翻訳であったが、その中では「同性的なる情欲」という表現(古川 1995: 203)や「異常情欲感動」というやや意識的な訳語(斎藤 2000: 4)がみられたようである。

9 古川(1995)は、この「同性の愛」を英語 homosexual の訳語として捉えている。また、黒岩(2008)は「青年」での「同性の愛」は「肉体的な〈性欲〉ではなく、精神的な〈愛〉」としている。

尚、英語の homosexual や homosexuality の早期の使用例について、O.E.D は *Psychopathia Sexualis* III の英語訳版(C.G. Chaddock 訳)(1892)を引いている。また、Homosexuality という言葉の成立については、古川(1995: 201-202)や風間・河口(2010: 30)に詳しい。

1) そのうちに手を握る。頬摩をする。うるさくてたまらない。僕には Urningたる素質はない。  
(森「キタ・セクスアリス」 1909:27)

2) 純一の笑ふ顔を見る度に、なんと云ふ可哀い目附きをする男だらうと、大村は思ふ。それと同時に、此時ふと同性の愛といふことが頭に浮んだ。(中略)自分はhomosexualではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかといふことが、一寸頭に浮んだ。  
(森「青年」 1911:6)

2か月後の『読売新聞』に報じられた「恐るべき同性の愛」にも「同性の愛」の使用がみられる。この記事は、2人の女学生の投身心中が報じられたもので、俗に言われる「オメ<sup>11)</sup>」が「同性の愛」と記されている<sup>12)</sup>。また、1912年に出版された、医師・田中祐吉<sup>13)</sup>の『男女の性欲研究』では、「男子にして男子を愛し女子にして女子を慕ふが如き異常の現象」が「同性の愛」で表されており、1911年、12年当時においては、男性間、女性間の所謂同性愛は共に「同性の愛」という言葉で表されていた<sup>14)</sup>。

3) 両人の関係は俗に謂ふ「オメ」の関係にて近時各女学校にて盛に行はるゝ一種厭ふべき同性の愛なり  
(「恐るべき同性の愛」 1911)

4) 異性相牽引し相愛慕するは人性の自然であるが、然るに時として男子にして男子を愛し女子にして女子を慕ふが如き異常の現象がある、同性の愛とは、即ち之を指すので、世人の予想以外に汎く社会の裏面に行はれゐる一種の陋風である。

(田中『男女の性欲研究』 1912:85)

但し、1911年8月の『婦女新聞』では、用例3であげた女学生の事件が「同性の恋」と表されており混用もみられた<sup>15)</sup>。

5) 曾根某、岡村某といふ二人の令嬢の情死事件は、事件そのものが珍しいので世間の注意を惹いた、同性の恋と言ふことが此の事件の為に教育家の間にも父兄の間にも注意するゝに至るなら、我が教育界にとつて二嬢の死は犬死でない。

(島中「同性の恋と其实例」 1911)

10 本稿での引用例の詳細は、巻末の「引用文献」に掲載番号の順にあげた。引用は原文通りの表記としたが、日本語の漢字表記は新字体に改め、ルビを省略し、中国語は簡体字を用いた。また、引用の下線、及び訳者名が明記されていない中国語引用の邦訳は筆者に拠るものである。

11 「おめ」の意味については、1919年の『現代新語辞典』(耕文堂)には、「女学生間にありて、上級の女生が下級の美少女を恋情的に愛するをいふ」とある。

12 日本社会学院調査部.1920.『風俗問題』(冬夏社、205ページ)は、女性同士の間はこの事件の前にもみられ、同性者の関係は叔母姪、姉妹、友人等で、職業には雛妓、下女、郵便局、事務員、娼妓、女工等で、女工の数が最も多いと指摘する。また、平石(2012:282)も10代の女学生同士の擬似恋愛は1900年代初めにおいてそれほど珍しいことではなかったと指摘している。

13 田中祐吉(1874-1944)は、1922年に雑誌『変態性欲』(1922.5.創刊、1925.6.休刊)を主幹した田中香涯の本名である。

14 「同性の愛」は月刊『不二』(第1号、1913.11.15、35-39ページ)の有岡の里人「同性の愛に耽る女性」にもみられる。

ところが、1911年11月5日の『読売新聞』には「研究すべき同性愛」が掲載され、記事のタイトルや本文にも「同性愛」が使用されている。同記事は、アンデルセンやオスカー・ワイルドなどが所謂同性愛者であったことなどを紹介し、「男性と男性の愛、女性と女性の愛」を「同性愛」という一語で説明している。著者の中原青蕪については詳細不明であるが、記事の内容からは西洋の文献の翻訳を通して、「同性愛」が訳出された可能性が高い<sup>16</sup>。

- 6) 同性愛、この現象に就ては近来独逸ではオイレンブルヒ事件の突発した以来非常に興味を持たれて研究されてゐる事象である。同性愛之を分けては男性と男性の愛、女性と女性との愛の二つになる。  
(中原「研究すべき同性愛」 1911)

また、1915年の羽太鋭治・澤田順次郎著『変態性欲論』にも「同性愛」が訳出されている。第3章「同性間性欲の概論」にはドイツ語Homosexualitätの訳語として、「同性間性欲」が当てられ、さらに「単に同性愛ともいふ」と記されている<sup>17</sup>。但し、同章の第3節「歴史に現はれたる同性間性欲」では、「同性恋愛」も使用されており、2者において用語はまだ定着してなかったようである。

- 7) これは謂はゆる同性間における顛倒性欲、乃ち同性間性欲 (Homosexualität. 単に同性愛ともいふ) にして、平たく言へば、男性にして他の男性を恋ひ、女性にして他の女性を慕ふ類のものこれなり。  
(羽太・澤田『変態性欲論』 1915: 42)

稗史に伝へられたるものには、太田道灌と二人の小姓、蒲生氏郷と名古屋山三、豊臣秀次と不破伴作、(中略)大川政右衛門、等にかかる、同性恋愛あり。

(羽太・澤田『変態性欲論』 1915: 46)

## 2 「同性恋愛」の訳出

羽太・澤田の『変態性欲論』にも使われた「同性恋愛」という言葉は、実は1911年の内田魯庵の随筆に既に使われており、1910年代前半に訳語に屢々あてられていた。1911年の『新公論』9月号に「性欲論」の特集が組まれた際に、内田魯庵はベルリンに「同性恋愛を研究する会」があると記している。

- 8) 伯林には同性恋愛を研究する会があつて、其会員の一人なる或る博士は昆蟲や男色を研究してゐるといふ奇談がある。  
(内田「性欲研究の必要を論ず」 1911: 2)

15 「同性の恋」という言葉の早期の使用は、1908年の秋田雨雀「同性の恋」(『早稲田文学』第19号、6月、32-46ページ)に題目としてみられる。また、1913年の田村とし子の小説「同性の恋」(『中央公論』1月号、105-108ページ)にも、女性間の所謂同性愛が「同性の恋」で表されている。

16 ほぼ同時期に、西洋の詩人や作家を紹介した、中原青蕪 1909「海外思潮」(『文章世界』第4巻第11号、102-103ページ)や青蕪 1910「文壇うめ草」(『太陽』第16巻第12号、213-214ページ)などがあり、中原青蕪は西洋事情に詳しかったと思われる。

17 「同性間性欲」という言葉は、澤田の初期の論文「同性間性欲ト犯罪」(1914)にみられる(古川 1995: 204)。また、羽太鋭治 (1878-1929)、澤田順次郎 (1863-?) は共に性科学者で、羽太は『性と人生』、澤田は『性』『性の科学』の雑誌をそれぞれ 1920 年に創刊している。また、澤田は同年『神秘なる同性愛』(天下堂)も出版している。

1913年には、Krafft-Ebing の *Psychopathia Sexualis* の全訳『変態性欲心理』（大日本文明協会編）が出版され、訳者・黒澤良臣は、Homosexuelle Liebe の訳語として、「同性的恋愛」をあてている<sup>18</sup>。但し、巻末の「索引」には、「同性恋愛（Homosexuelle Liebe）」と記載されている。

9) Eine Veranlagung in For der Bisexualität oder der mangelhaften Fundirung einer der Entwicklung der normalen Sexualität dienenden Einrichtung oder der conträren Sexualität vorausgesetzt, lassen sich folgende Entstehungsmöglichkeiten für homosexuelle Liebe anführen :

(Krafft-Ebing *Psychopathia sexualis* 1903 : 282)

両性色情或は尋常なる色情の発達的基础の不十分、或は顛倒的色情の形式に於ける素質を前提とするを得ば、同性的恋愛の成立に関して、次の事項は可能となるべし。

(黒沢『変態性欲心理』 1913 : 308)

さらに、1914年の『青鞥』（4月号）に掲載された、野母訳「女性間の同性恋愛—エリス—」でも、訳語として「同性恋愛」があげられている。この翻訳は、平塚らいてうが、青鞥社の社員である野母に Havelock Ellis の *Sexual Inversion in Women* (*Studies in the psychology of sex II*) を抄訳させたものである。この訳文では、Homosexuality、Sexual inversion が「同性恋愛」と訳出されている。この本文の冒頭には平塚らいてうによる、野母の抄訳に至る経緯が寄せられている。その中でらいてうは、「女学校の寄宿舎などで同性恋愛といふやうなことが行はれてゐるやうなことを屢々耳にはいたしますけれど」と記している。1914年当時、らいてうにとっても「同性恋愛」は理解語彙だったようである。

10) Homosexuality has been observed in women from very early times, and in very wide-spread regions. Refraining from any attempt to trace its history, and coming down to Europe in the eighteenth century, we find a case of sexual inversion in a woman, which seems to be recorded in greater detail than any case in a man had yet been recorded.

(Ellis *Sexual Inversion in Women* 1901 : 118)

昔から、至る処に於いて、女性の間に同性恋愛が存在したことは事実である。それを遠く歴史に遡つて追索するのは暫くおいて、今降つて十八世紀の欧州を見れば、吾人は測らずも婦人間の同性恋愛の一例を見出すのである。そして其記録は、男子のそれに比して、遙かに詳細を極めてゐる。

(野母「女性間の同性恋愛」 1914 : 2)

同年1914年には、Edward Carpenter の *The Intermediate Sex* (1912) が青山菊栄により、「中性論」と題して翻訳された<sup>19</sup>。第2項の「中性 (The Intermediate sex)」では、the special affectional temperament of the 'Intermediate' が「中性タイプにしてもなほその特異な愛着の（即同性恋愛）傾向」と訳され、「同性恋愛」がカッコの中に説明書きされている<sup>20</sup>。

18 訳者については、同書の「例言」に拠る。尚、同書の底本は 12 版 (1903)、13 版 (1907)、14 版 (1912) の何れの訳とされる (斎藤 2006 : 6)。

19 「中性論」は 1914 年の『番紅花』5 月号から 7 月号に、「1 緒言、2 中性 (The Intermediate Sex)、3 同性の愛、4 愛情の教育、5 社会に於ける中性者の位置」という構成で掲載された。

- 11) It is also worth noticing that it is now acknowledged that even in the most healthy cases the special affectional temperament of the 'Intermediate' is, as a rule, ineradicable;

(Carpenter *The Intermediate Sex* 1912 : 23)

亦最も健全な中性タイプにしてもなほその特異な愛着の（即同性恋愛）傾向の到底改め難い事まで今日は認められて来たのも注目すべき点である。（青山「中性論」 1914 : 11-12）

このように、1910年代前半には、所謂同性愛を表す言葉として、「同性の愛」や「同性の恋」、「同性愛」のほか、訳語「同性恋愛」も使用されていた<sup>21</sup>。

### 3 「同性愛」への収斂

1910年代前半に、所謂同性愛を表す言葉が混用される中、1910年代後半になると言葉が収斂されてくる。1917年に出版された雀部顕宜著『女性の心理』の「序」には、「本書はなるべく多くの婦人のかたの間にも読者を得たく、（略）出来る限り平素な通俗的なものに編述することゝした」（雀部 1917 : 2-3）と記述され、本文で使用されている「同性愛」の汎用が窺える<sup>22</sup>。

- 12) 然らば何故に世間では、女性間の同性愛に就て語る所少く、実際の事実より過少視されたのであらうかと言ふに、雑と四つばかり其の理由を挙げる事が出来る。

（雀部『女性の心理』 1917 : 190-191）

さらに、次の2例からは、「同性恋愛」から「同性愛」に収斂される経緯がみえる。一つは、1919年の山川菊栄訳の「同性愛」である。これは、用例11にあげた、青山菊栄訳の「中性論」が、「同性愛」と改題され、堺利彦・山川菊栄訳『女性中心と同性愛』に所収されたもので、内容は同じものである<sup>23</sup>。1914年の「中性論」で「同性恋愛」と訳出されていた幾つかの箇所は、「同性愛」に改められている。但し、用例11で、カッコの中に説明書きされた「同性恋愛」はそのままであった<sup>24</sup>。

- 13) Then coming to the literature of the Roman age, whose materialistic spirit could only with difficulty seize the finer inspiration of the homogenic love, and which in such writers as Catullus and Martial could only for the most part give expression to its grosser side, we still find in Vergil, a noble and notable instance. (Carpenter *The Intermediate Sex* 1912 : 44)

さて羅馬時代の文学になると、当時の物質的気風のために、同性愛の靈妙なインスピレーションに触れなくなつた、殊にカツルスやマーシャルの如き詩人に在つては、単にその野

20 次号の6月号に掲載された「3 同性の愛」の本文の中にも、「同性恋愛」が多用されている。

21 「同性恋愛」は1920年代初め、市島春城『蟹の泡 奇談 150篇』（早稲田大学出版部、1921）や黒田礼二の「同性恋愛の奇現象」（『蝙蝠日記』大鑑日記、1922、36-37ページ）の中でもみられた。

22 「序」には、著者が1913年に奈良高等師範学校の教授であった際、文部省の委嘱により同校で開催された夏期講習会での講義の原稿を訂正したものであることも記されている。

23 山川菊栄とは、1916年に山川均と結婚した、青山菊栄である。

24 例えば、第3章「同性の愛」においては、「同性恋愛」から「同性愛」に改められた箇所が5箇所、「同性の愛」から「同性愛」に改められた箇所が2箇所あった。

鄙な方面のみ表現したに過ぎないが、それでも猶ヴァジルの詩に高尚な顕著な例を見出すことが出来る。(山川「同性愛」 1919:199)

もう1例は、1922年の田中祐吉著の『人間の性的暗黒面』で、Homosexualitätの訳語にあてられた「同性愛」である。田中は用例4で示したように、1912年の『男女の性欲研究』では、所謂同性愛を「同性の愛」としていた。

14) 男子が女子を恋ひ、女子が男子を愛するは、自然であるが、之に反して同性に向つて専ら愛情を傾け、異性を嫌忌する一種病的の人間がある、此の如きものは屢々身心の健全なる人に於ても認めらるゝことで、唯だ性欲のみが変化してゐるのである、医学上では同性愛Homosexualitätを称して性欲顛倒Konräre Sexual- Empfindungといひ、性欲倒錯の一種としてある、(田中『人間の性的暗黒面』 1922:40)

このような用例から、所謂同性愛を表す言葉が1910年代後半から1920年代初めに、「同性愛」という1語に収斂されていったと言える。それは、1922年の『ポケット顧問 や、此は便利だ』(平凡社)に見出し語として「同性愛」が収録されていること<sup>25</sup>、さらには、1927年の『双解独和辞典』(南江堂書店)と『Kenkyusha's new English-Japanese dictionary』(研究社)に、HomosexualitätとHomosexualityの訳として「同性愛」が収録されていることから裏付けられる<sup>26</sup>。

### III 民国期における“同性恋愛”・“同性愛”の汎用

#### 1 訳語としての“同性恋愛”・“同性的愛”

中国において本格的な性科学の研究がなされたのは1940年代に入ってからと指摘される(施2008:9)。しかし、民国初期の1920年代前半の《婦女雑誌》<sup>27</sup>には、日本語からの重訳や随筆の翻訳がみられた<sup>28</sup>。1920年8月の《婦女雑誌》には、正声によりCarpenterの*The Intermediate Sex*の最初の2章(緒言、中性)が翻訳され、訳語として“同性恋愛”が当てられている<sup>29</sup>。この*The Intermediate Sex*は、用例11に示したように、1914年に青山菊栄訳「中性論」と題して翻訳され

25 その意味は、「男子でありながら男子を女子でありながら女子を、恋愛の相手とするをいふ。変態性欲の一種。古くは男子の間に多く行はれたが、今はかへつて女子の間に多く行はれるといふ」とされる(下中芳.1922.『ポケット顧問 や、此は便利だ』平凡社、369ページ)。

26 1920年以降には、『神秘なる同性愛』(澤田順次郎、天下堂、1920)、『同性愛の種々相』(花房四郎訳、文藝市場社、1929)など、書名にも「同性愛」の使用がみられるようになる。

27 《婦女雑誌》(1915.1 創刊、1931.12 停刊)は、上海商務印書館発行の月刊誌。1921年に章錫琛を主編者に迎え、1925年までに、恋愛や婚姻の自由に関する論文が数多く掲載された。日本の近代の恋愛観や女性解放などに関する随筆も多数翻訳されている。

28 1915年に創刊された《新青年》には、小酒井光次原著の〈女性与科学〉(《新青年》第1巻第4号、1915.12)・〈青年与性欲〉(《新青年》第1巻第5号、1916.1)など、性科学に関する論文の翻訳の掲載もあったが、所謂同性愛に言及する内容のものではない。



ている。用例11で青山がカッコに付した「同性恋愛」は、正声訳においても、“同性恋愛”が内に付されており、青山訳を参照した可能性が高い<sup>30</sup>。

- 15) It is also worth noticing that it is now acknowledged that even in the most healthy cases the special affectional temperament of the 'Intermediate' is, as a rule, ineradicable;

(Carpenter *The Intermediate Sex* 1912 : 23)

而且最健全的中性模型有如那终始不变的特异恋爱（即同性恋爱）的倾向，今日已认为最可注目的一点。

（正声訳〈中性論〉 1920 : 7-8）

1922年の幼雄訳〈男性的女子和女性的男子〉は、冒頭に「日本中田香涯原著」とあり、田中香涯の文献が翻訳されたと思われる<sup>31</sup>。この翻訳では“同性的愛”と訳されている。

- 16) 又俄国彼得大帝之皇女，爱利沙倍太女皇，是经过七年战争，英名卓著的君主，人所共知；她也爱着男装；喜欢同性的爱；但在异性间，也极淫乱。

（幼雄〈男性的女子和女性的男子〉 1922 : 61-62）

（また、ロシアのピョートル大帝の皇女・エリザヴェータ女は、七年戦争を経て、名声立つ君主であり、よく知られている。彼女が男装の着用を愛し、同性の愛を好んだものの、異性間においても極めて淫乱であった）

現在のところ、田中香涯の底本は確認できていないが、用例4の田中香涯著『男女の性欲研究』にも「同性の愛」が使用されており、幼雄が引いた底本も「同性の愛」と記されていたことが推測される。

## 2 汎用される“同性愛”・“同性恋愛”

《婦女雑誌》には1923年以降も所謂同性愛に関する論文が掲載され、その際には“同性恋愛”や“同性愛”が用いられている。用例17は、女学校に流行る所謂女性の「同性愛」について論じられたもので、“同性愛”が用いられている。中国においても日本よりやや遅れ同現象が表面化したことが窺える<sup>32</sup>。

- 17) 去年下学期，有某地女子师范学校发生风潮，我们此间会接到一种传单，系该地人士攻讦校长的话；其中有一条，是说该校学生同性爱习惯的流行，以为这是校长管理不善所致。

（晏始〈男女的隔離与同性愛〉 1923 : 14）

（昨年度の後期、某地の女子師範学校で発生した風潮があり、我々はこの時宣伝ビラを受

29 訳者の正声については詳細不明であるが、2か月前の《婦女雑誌》（第6巻第6号）にも、正声訳〈新社会的結婚和家庭〉（久布白直勝原著）が掲載されており、日本語に長けていたと思われる。

30 その他の箇所においても、青山が「同性恋愛」と訳した箇所は、正声訳においても“同性恋愛”と訳されている。

31 幼雄についても詳細不明であるが、1920年から25年までの《婦女雑誌》には、幼雄訳の日本文献は27編ある（村田雄二郎編・2005『《婦女雑誌》からみる近代中国女性』研文出版社、26ページ）。

32 中国における女性の同性愛について、小野和子・1978「女工たちの結婚拒否」（『中国女性史』平凡社、163-166ページ）は、第一次世界大戦中、中国の民族工業（紡績、製糸、マッチなど）が、めざましい発展をとげ、広東の女工たちには同性愛がみられたと指摘している。

け取った。その地の人が校長の過失を暴いて責めるという話である。その一つは、その学校の学生に同性愛の習慣が流行ったのは、校長の管理が行き届いてないからだそうだ)

晏始についても、前出の正声や幼雄と同様、詳細は不明であるが、1922年1月の《婦女雑誌》に〈日本老婦人之赴美〉(「日本老婦人のアメリカ行き」)という随筆が掲載されており、日本の事情に通じていたと思われる<sup>33</sup>。

1926年には、中国人留学生・張資平による翻案恋愛小説《飛絮》にも“同性愛”の使用がみられる<sup>34</sup>。底本である「帰る日」に描写された、ヒロインが叔母と同じ布団に入った際に生じた感情が、《飛絮》にも挿入され、それが“同性愛”と表現されている<sup>35</sup>。

18) 云姨母只说山里天气凉, 凑近些睡暖和些, 但我觉得云姨母的亲近我带有点儿同性爱的分子。 (張資平《飛絮》 1926: 52)

(雲叔母は山の気候は涼しいから少し近寄って寝ると暖かくなると言ったが、私には叔母の接近が同性愛の感情をもたらすと思えた)

1927年には、Carpenterの*Love's Coming-of-Age* (1911) が、樊仲雲により《恋愛論》と題して翻訳された<sup>36</sup>。ここでは、底本にあるhomogenic natureが“同性愛”と訳されている。この樊仲雲訳は、用例13の山川菊栄訳からの重訳とは考えられないが、《恋愛論》の第7章〈中性〉には“同性愛”の使用が多数みられ、山川訳を参照したことも推測される<sup>37</sup>。

19) These are types which, on account of their salience, everyone will recognize more or less. Naturally, when they occur they excite a good deal of attention, and it is not an uncommon impression that most persons of the homogenic nature belong to either one or other of these classes. (Carpenter *Love's Coming-of-Age* 1911: 134)

像这类的人物, 因为特别显著, 所以谁都能够辨别出来。他们的出现, 常自然的能够引起人的注意, 普通都以为这类人物, 大概都具有同性爱的倾向。(樊仲雲訳《恋愛論》 1927: 140)

(このようなタイプの人とは顕著である為誰もが見分けることができる。彼らはいつも自然に人の注意を引くので、普通にこのような人は大抵同性愛の傾向を持つと思われる)

33 晏始〈日本老婦人之赴美〉《婦女雑誌》(第8巻第1号、1922.1、60-61ページ)には、東京キリスト教婦人矯風会を組織し、1893年には日本キリスト教婦人矯風会会頭となった、矢島楯子が89歳にして渡米したことが紹介されている。

34 張資平(1893-1959)は、約10年間の日本留学を終え、1922年5月に帰国。1920年代に恋愛小説を数多く発表している。《飛絮》の〈序〉で、池田小菊の「帰る日」(『東京朝日新聞』1925.5.1-7.29)の翻案小説であることを明らかにしている。

35 但し、底本である「帰る日」に「同性愛」という言葉は特に使用されていない。尚、張資平は自伝《我的生涯》(上海現代書局、1932)の中でも、自らの成長期の体験を“同性愛”と表現している。

36 樊仲雲は、1929年に設立された作家協会の発起人の一人である。

37 但し、用例19の同箇所は、用例13の山川訳「同性愛」(『女性中心と同性愛』)では、「同性偏愛」と訳されている。尚、用例13の山川訳はCarpenterの*The Intermediate Sex*の翻訳で、用例19の樊訳はCarpenterの*Love's Coming-of-Age*の翻訳である。両底本には*The Intermediate Sex*と題した、同じ内容のものが所収されており、用例13も用例19もこの*The Intermediate Sex*の章からの引用である。

1927年の茅盾の小説〈幻滅〉の中でも、女性同士の関係を描写する際に、“同性愛”が使用されている。ここでいう彼女たちとは主人公・章と友人・王女史を指し、彼女たちが姉妹のように親しくしているのを見て、趙女史が“同性愛”だと揶揄している<sup>38</sup>。

20) 他 <sup>(ママ)</sup> 俩既是这等亲热，且又同居，因此赵女士常说他们是同性爱。

(茅盾〈幻滅〉 1927 : 29)

(彼女たち2人がこのように仲良がよく、さらに一緒に住んでいるので、趙女史は、彼女たちが同性愛だといつも言っている)

このように1920年代に随筆や小説などに“同性愛”が汎用される一方で、“同性恋愛”の汎用もみられた。

1926年4月には、北京大学の教授であった張競生著《性史》(北京優種社)の第1集が出版された<sup>39</sup>。その後出版された第2集には〈我之同性恋愛〉と題した、浮海客(既婚男性)の体験談と小江平による助言が掲載されている。体験談でも、助言でも“同性恋愛”が使用されている<sup>40</sup>。

21) 我在小学校时代，同学中年龄小的不过十一二岁，年龄大的却有十八九岁，性的知识，大概很模糊影响的：可是很自然的发生了许多同性恋爱的事实。

(浮海客〈我之同性恋愛〉 1926 : 52)

(私が小学校の頃、同級生の年齢は小さいほうは11、2歳、大きいほうは既に18、9歳になっていましたから、性の知識についてはいくらか影響を受けていました。しかし、自然に発生した多くの同性恋愛がありました)

同性恋愛发生的原因，既由于身体中含有异性成分的发展的而来，故凡其性质而有几分类似异性的，必易起同性恋爱的病症。

(小江平〈我之同性恋愛〉 1926 : 57)

(同性恋愛が発生する原因は、身体に含まれる異性成分の発展に依るものである。故に、その性質がいくらか異性に類似したものがあるならば、同性恋愛の病症を引き起こしやすい)

### 3 潘光旦の書き換えにみる“同性恋”

社会学者・潘光旦が1920年代から40年代に記した論文や著書からは、“同性愛”“同性恋愛”から“同性恋”への書き換えがみられる<sup>41</sup>。1924年11月の《婦女雑誌》に掲載された潘光旦の〈馮小

38 茅盾(1896-1981)が日本に亡命中(1928.7-1930.4)に執筆した長編小説《虹》(1930)の中でも“同性愛”の使用がみられる。

39 張競生(1888-1970)は、1911年の辛亥革命後フランスに留学、哲学博士として帰国。1921年に北京大学学長蔡元培から教授として招聘され、人生美学や社会美学を教え、学生たちの人気を博す(邱 2000:208)。《性史》第1集は、張競生が北京大学在職中に性に関する体験レポートを募集し、寄せられたレポート(200余編)から北京の大学生による7編が選び出版されたもの(楊群,1999,《張競生伝》花城出版社、383ページ)。

40 第2集の初版の時期は明確ではないが、第3集初版が1927年2月であるので、第1集初版の1926年4月から27年2月までの間とされる(土屋 1990:258)。また、第2集は、同じ内容のものが、同じ出版社から、北京大学教授哲学博士・張競生編と北京大学教授哲学博士・小江平編の2種類が出版されている。第2集の助言者は、第1集に〈初次的性交〉という一文を寄せた小江平だとされる(土屋 1999:286)。

青考》の中には、“同性愛”と“同性恋愛”が使用されていた。前述したように、1920年から23年の《婦女雑誌》には、翻訳や随筆などに“同性恋愛”や“同性愛”が使用されており、潘光旦がこれらを参照した可能性は高いであろう。〈馮小青考〉では馮小青（1595-1612）の詩が取りあげられ、馮小青にみられた“影恋”（自己愛）を精神分析の視点から論じている<sup>42</sup>。“同性愛”と“同性恋愛”の使い分けも特にみられず、1924年の時点では、この2語が混用されている。

22) 精神分析論者謂有自愛的性心理的人，其有變動時，大率趨向同性愛一途，小青与楊夫人相与之日，其影恋的程度比較尚淺，其受環境之影響亦較易，而其戀愛生活乃漸有同性的趨向，讀其致楊夫人書。  
（潘光旦〈馮小青考〉 1924：1714）

（自愛の性心理を持った人に変動が生じた時に殆んど同性愛になる、と精神分析論者は主張している。小青が楊夫人与付き合い合った日は、其の自己愛の程度は比較的まだ浅かった。その環境から受けた影響も比較的穏やかだった。だが、その恋愛の生活は次第に同性の趨向を帯びていった。楊夫人に宛てた手紙を読むと昔が偲ばれる）

23) 昔女子之顧影自怜以至于积重难返者大率因深居简出而绝少闺中膩友之故；其行动略较自由，交游略较广阔者，又多流入同性恋愛一途。是以女学与而影恋之机绝，男女同校之法行而同性恋愛之风衰；  
（潘光旦〈馮小青考〉 1924：1717）

（昔、女性の自己陶醉が長年の習慣で急には改められないのは、だいたい家の中ばかりに引っ込んでめったに外出しなく、女性の親友が極めて少なかったゆえである。しかし、その行動が比較的自由で、交際も比較的広く闊達であった人は、その多くは墮落して同性恋愛になった。したがって女学によりナルシズムが絶え、男女同学の法の施行により同性恋愛の風潮が衰えることになる）

ところが、1929年に新月書店から出版された、潘光旦の《馮小青——一件影恋之研究》では“同性恋”が使用されている<sup>43</sup>。この《馮小青——一件影恋之研究》は、1924年11月号の《婦女雑誌》に掲載された〈馮小青考〉が大幅に加筆されたもので、〈馮小青考〉で表記された、“同性愛”や“同性恋愛”は“同性恋”に改められている<sup>44</sup>。

24) 夫异性恋之生活至复杂也；唯其复杂，故顺应之之方，亦较顺应自我恋与同性恋等生活为繁剧；惟其繁剧，精神略脆弱者在平时已有不能应付之势，况当凄风苦雨之候乎？

41 潘光旦（1899-1967）は、1922年8月に〈馮小青考〉を脱稿、9月に清華学校を卒業後アメリカに留学、生物学を主専攻とし、遺伝学、優生学などを学ぶ。コロンビア大学で修士の学位を取得後、1926年に帰国。以後清華大学、中央民族学院などで教鞭を取る一方、優生学、社会思想史、性心理学などの分野で数多くの論文、著書、翻訳を手がける（潘・潘 2000 参照）。

42 潘光旦は、〈馮小青考〉で“西文称影恋為 Narcism”（西洋では影恋をナルシズムと言う）と Narcism を“影恋”と訳している。

43 《馮小青——一件影恋之研究》は、現代の精神分析法を応用して変態的な性心理を探索した中国の最初の著作とされる（劉 1999：610）。

44 本書には、5箇所“同性恋”が使用されている（内、“同性恋者”が1件）。但し、1箇所だけ“同性恋愛”の使用がみられた。

(潘光旦《馮小青——一件影恋之研究》 1929 : 31)

(その異性愛の生活は複雑に至る。複雑だからこそ、故にこれに順応する方が自我愛と同性愛に順応するより繁雑で厳しい。繁雑で厳しいからこそ、精神がむしろ脆弱な者は、平時は已に対処できない状態がある。まして、冷たい風や長雨の頃は言うまでもない)

潘光旦は、1924年から5年後の1929年に“同性恋”に書き改めたことになる。実は、《馮小青——一件影恋之研究》が出版される1年前の1928年、沈從文の小説〈阿麗思中国遊記〉でも“同性恋”の使用がみられた。この小説は「不思議な国のアリス」をモチーフにしたもので、マヒワとヒバリの関係が比喩的に“同性恋”と表わされている。

25) 然而当真他们是一对同性恋的，大致是有同样聪明伶俐而又同样小身个儿，所以就互相羡慕要好起来了。

(沈從文〈阿麗思中国遊記〉 1928 : 35)

(彼らは同性愛だったけれども、同様に聡明で利口で、さらに同様に体も小さかったので、互いに慕い合うようになった)

この〈阿麗思中国遊記〉は新月書店の月刊誌《新月》に掲載され、2ヶ月後、同じく新月書店から《阿麗思中国遊記》として出版されている。潘光旦が《新月》の同人であったこと、《麗思中国遊記》と《馮小青——一件影恋之研究》が共に新月書店から出版されていることなどからは、両者の“同性恋”の使用には関連性があったとも推測される。

その後1946年に出版された、潘光旦訳註《性心理学》でも、潘光旦は“同性恋”を訳語にあてている<sup>45</sup>。同書はHavelock Ellisの*Psychology of Sex* が訳註されたもので、底本のhomosexualityに“同性恋”が当てられている。

26) When the sexual impulse is directed towards persons of the same sex we are in the presence of an aberration variously known as “sexual inversion,” “contrary sexual feeling,” “uranism,” or more generally, “homosexuality,” as opposed to normal heterosexuality.

(Ellis *Psychology of Sex* 1933 : 188)

假如一个人的性冲动的对象是一个同性而不是异性的人，就这另成一种性歧变的现象，有人叫做『性的逆转』“sexual inversion”，或『反性感』“contrary sexual feeling”或『优浪现象』“uranism”，比较最普通的名词是『同性恋』“homosexuality”，所以别于常态的异性恋“heterosexuality”。

(潘光旦《性心理学》 1946 : 218)

(もし、人の性の衝動の対象が同性で異性でなかったなら、これは一種の性の異常な現象で、「性の逆転」(sexual inversion)、或いは「反性感」(contrary sexual feeling)、或いは「優浪現象」(uranism)とも言われるが、よく言われる名詞は「同性恋」(homosexuality)であり、正常の「異性恋」(heterosexuality)とは別である)

潘光旦が1924年に《婦女雑誌》で“同性愛”“同性恋愛”を混用しながら、1929年の《馮小青——

45 潘光旦訳註《性心理学》の〈訳序〉(1941.12.付)には、潘光旦が、1939.11.13から同書の翻訳を開始し、1941.11.27に訳了したことが記されている。また、同書の表紙の扉には底本が1933年の*Psychology of Sex*であることが明記されている。

一件影恋之研究》で“同性恋”に改め、1946年の訳註《性心理学》においても“同性恋”をあてたのは、彼自身の中では、“同性恋”が定着していたのであろう。但し、1920年代から40年代の辞典類には“同性恋”の収録はみられず、“同性愛”や“同性恋愛”のほうが汎用されていたようである。

1928年に出版された《綜合英漢大辞典》にはTribadismの訳語として“婦人之同性愛”が収録され、翌1929年の《新術語辞典》には、見出し語として“同性恋愛”が収録され、Homosexualityの訳語とされている。また、1930年の国語辞典《王雲五大辞典》も“同性恋愛”を収録し、1948年に増訂された《新知識辞典》も“同性恋愛”を収録し、「同性の恋愛は青年期に異性と接触する前に最も発生しやすい」と説明されている。

《綜合英漢大辞典》（商務印書館、1928）：

【Tribadism】婦人之同性愛，妇女間之非自然的性欲。（婦人の同性愛。婦女間の自然ではない性欲）

《新術語辞典》（南強書局、1929）：

【同性恋愛】（Homosexuality）这是一种变态性欲，对于同性（如男人对男人或女人对女人）发动性欲，而对异性反不感兴趣。（これは一種の変態性欲。同性に対して（例えば、男性が男性に対して、女性が女性に対して）性欲を発するが、異性に対して興味を感じないこと）

《王雲五大辞典》（商務印書館、1930）：

【同性恋愛】女与女或男与男間發生的戀愛。（女性と女性或いは男性と男性の間に発生する恋愛）

《新知識辞典》（北新書局、1948増訂1版）：

【同性恋愛】（Homosexuality）同性与同性間所發生之一变态性愛。如男子愛男子，女子愛女子等。同性恋愛在青年时代尚未与异性接触以前最易发生。

（同性と同性の間に発生した一種の変態性愛。例えば男性が男性を愛し、女性が女性を愛することなど。同性の恋愛は青年期において、異性と接触する前に最も発生しやすい）

このように、民国期の辞典類は“同性愛”や“同性恋愛”を収録していた。では、潘光旦に使われた“同性恋”は、現代中国語としてどのように定着するようになったのであろうか。

#### IV 新中国以降にみる“同性恋”への収斂

##### 1 1980年代以降の《人民日報》にみる“同性恋”

新中国に入った1950年代の《人民日報》<sup>46</sup>には、アメリカやイギリスにみられる所謂同性愛に関する情報を伝えられ、その際にはやはり“同性恋愛”と“同性愛”が使われていた<sup>47</sup>。ところが、文

46 《人民日報》は中国共産党中央委員会の機関紙で1948年以降発刊されている。

47 1951年に“同性愛”が、1957年に“同性恋愛”が使用された記事が各1件ずつあった。

化大革命後の1980年以降は、その記事内容は、1950年代同様、海外にみられる所謂同性愛の情報であるものの、“同性恋”の使用が多くみられるようになる<sup>48</sup>。

- 27) 旧金山市長選挙本已在十一月举行过了，但由于有一个同性恋的商人斯科特赢得了百分之十的选票，使得现任女市长范因斯坦和现在督察员柯普都未能超过半数。

(張彦〈市長選挙与美国式民主〉 1980：第7版)

(サンフランシスコ市長選挙は既に11月に行われたが、同性愛者である商人・スコットが10%の得票を勝ち取ったため、現女性市長ファインスタインと現検査官カップは過半数を上回ることができなかった)

- 28) 他们痛恨的是同性恋、电视上的性问题、平等权利修正案、美国教育部。

(王飛〈美国保守主義的派別〉 1981：第7版)

(彼らが恨むのは、同性愛、テレビに流れる性問題、平等権利の修正案、アメリカ教育部である)

1985年以降にはエイズ関連の情報が多く伝えられるようになるが、その際にも殆ど“同性恋”が使われている<sup>49</sup>。

- 29) 近年来，一种使人感到恐惧、厌恶、羞耻和神秘的病——获得性免疫缺损综合症，正日益广泛和迅速地在西方国家流行开来。（略）患此病的人绝大多数（90%）是男同性恋者。

(楊貴蘭〈西方的獲得性免疫欠損綜合症〉 1985：第7版)

(近年、人が恐れ嫌い、恥ずかしいと感じる得体の知れない病——後天的性免疫欠損綜合症が、日に日に広範囲、且つ急速に西洋各国に流行している。（中略）この病気に罹った人は圧倒的多数（90%）が男性同性愛者である)

- 30) 美国全国已知有一万三千多爱滋病例，一半已死亡。虽然其中99%是属于同性恋者、注射毒品者、输血者或是女患者的子女，但也有1%的病人不属于上述几种人的范围。

(張充文〈愛滋病帶來的社會問題〉 1985：第7版)

(アメリカ全土には既に1万3千余りのエイズの例があり、半分は亡くなったと知らされている。その中の99%は同性愛者、注射による麻薬者、輸血者或いは女性患者の子供であるが、1%の病人は上述の種類以外である)

1980年以降の《人民日報》で“同性恋”が多用されたことは、現代中国語としての定着に繋がったのではないかと推測される。

48 1980年から89年の10年間では、“同性恋愛”と“同性愛”が使われた記事件数はそれぞれ、1件と2件であったのに対し、“同性恋”（含む、“同性恋者”）が使われたのは50件であった。

49 エイズは、1981年アメリカCDC（国立防疫センター）発行のMMWR（『Morbidity and Mortality Weekly Report』＝伝染病週報）6月5日号の「ロサンゼルスで、若い男性同性愛者5人に発症したカリニ肺炎」、7月3日号の「ニューヨークとカリフォルニアで、通常みられないカポジ肉腫が若い男性26人に発生」の記事に始まる（『日本大百科全書』小学館、1994参照）。

## 2 《魯迅全集》（1981）の註に付された“同性恋”

一方で、“同性恋”が定着するようになった例として、1981年に出版された《魯迅全集》（人民文学出版社）での使用もあげられる。この《魯迅全集》の第5巻所収〈登龍術拾遺〉と第6巻所収〈七論“文人相軽一両傷”〉の本文に付された註に、“同性恋”の使用がみられる。いずれも、本文の“王尔德”（ワイルド）に付けられた註である。

魯迅は〈登龍術拾遺〉の本文で、オスカー・ワイルドについて、“以至濫交頑童，穷死异国”（不良青年と不純につき合い、他国で窮死した）とだけ記していた。1981年に全集が出版された際、“王尔德”に註がつけられ、文中にいう「不良青年との不純なつき合い」が“同性恋”と表されている<sup>50</sup>。

31）（註）[7] 王尔德（O. Wilde, 1856—1900）英国唯美派作家。著有童话《快乐王子集》、剧本《莎乐美》、《温德米尔夫人的扇子》等。曾因不道德罪（同性恋，即文中说的“濫交頑童”）入狱，后流落巴黎，穷困而死。（〈登龍術拾遺〉1981：276）

（原注[7]ワイルド（O. Wilde 1856—1900）イギリスの唯美派の作家。著書に、童話集『幸福な王子』、劇作『サロメ』、『ウィンダムア夫人の扇』などがある。不道德の罪（同性愛、すなわち文中にいう「不良青年との不純なつき合い」）によって入獄、のちパリに流浪して、貧困の果てに死去）（片山訳「登龍術拾遺」1986：310）

また、〈七論“文人相軽一両傷”〉に付けられた“王尔德”の註にも、“同性恋”が使われ、ワイルドがクウィーンズベリの長男アルフレッド・ダグラスと同性愛であったことが説明されている。1957年に出版された《魯迅全集》所収〈七論“文人相軽一両傷”〉にも“王爾德”に註が付けられたが、ワイルドが誹謗罪で訴えられ2年の監禁処分を受け、出獄後は外国に流寓し1900年にパリで死去したことが記されるに留まり、“同性恋”は使われていない。

32）（註）[7]一八九五年马奎斯指摘王尔德与其子艾尔弗雷德・道格拉斯搞同性恋，道德败坏。（〈七論“文人相軽一両傷”〉1981：406）

（原注[7]一八九五年、[クウィーンズベリ]侯は、ワイルドがその長男アルフレッド・ダグラスと同性愛をしていて道德が退廃していると指摘した）

（今村訳「文人は、互いに軽視しあう」こと、」1986：453）

1980年代後半以降に“同性恋”が優勢となったことは、現代中国語の規範とされる《現代漢語詞典》の記載からも窺える。《現代漢語詞典》の1973年の試用本以降1983年の第2版までは、“同性恋愛”が収録されていたが、1996年の第3版からは“同性恋”が収録されている。その意味は第3版では「一種の心理変態である」とされていたが、2005年の第5版では「性の心理障害に属す」と改められ、さらに2012年の第6版では「同じ性別の人における性愛行為」とだけ説明され、同性愛に対する捉え方の変化がみてとれる。

50 1957年に出版された《魯迅全集》（人民文学出版社）所収〈登龍術拾遺〉には、“王尔德”に註はつけられていなかった。



《現代漢語詞典》1973試用本・1978第1版・1983第2版：

【同性恋愛】男子と男子或女子と女子之间发生的恋爱关系，是一种心理变态。

《現代漢語詞典》1996第3版・2002第4版：

【同性恋】男子と男子或女子と女子之间发生的恋爱关系，是一种心理变态。也说通性恋爱。

（男性と男性或いは女性と女性との間に発生する恋愛関係であり、一種の心理変態である。同性恋愛ともいう）

《現代漢語詞典》2005第5版：

【同性恋】同性别的人之间的性爱行为，属于性心理障碍。（同じ性別の人における性愛行為で、性心理障害に属す）

《現代漢語詞典》2012第6版：

【同性恋】同性别的人知之间的性爱行为。（同じ性別の人における性愛行為）

このように、1980年以降、《人民日報》や《魯迅全集》などでも“同性恋”が使われるようになり、次第に“同性恋”に収斂されたのではないかと考える。

## V 「同性愛」と“同性恋”の定着の要因

日本語の「愛」について、「愛」は「恋」よりも意味範囲が広いという指摘もみられる<sup>51</sup>。語構成の観点から、「同性愛」と“同性恋”が定着した要因を探ってみたい。

表1は『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）と近代デジタルライブラリーに収録された、「□□+愛」構成の三字語が使用されている文献を年代順にまとめたものである<sup>52</sup>。ここからは1920年代に、「□□+愛」構成の言葉が多く造られていたことがわかる<sup>53</sup>。

51 『日本大辞書』（山田美妙、1983、1ページ）の「あい」の項には、「今日ノ普通ノ意味ニ因レバあいハこひヨリ意味ガヒロク即チあいハ一般外界ノ物ニ対シテノ想ヒニ差シ支ヘ無ク言ヘル、但シ、こひハ寧ロソノ一部分デ、主トシテ男女間ニ出ルイツクシミノ情ナドノ意味ヲ持ツ」とある。

52 近代デジタルライブラリーは、国立国会図書館デジタル化資料の <http://dl.ndl.go.jp/> を使用した（2012.7.31 検索）。表1には、『日本国語大辞典（第二版）』と近代デジタルライブラリーに収録された文献中、出版年の早い文献を掲載した。

53 「□□+恋」構成の三字語は、「一時恋（イットキコヒ）」（『浄瑠璃・薩摩歌』1711 頃）と「想夫恋（サウフレン）」（『徒然草』214 段、1331 年頃）だけで、それ以外は「うたかたの恋」「老いらくの恋」のような句としての表現のみであった。

表1：「□□+愛」構成の語の使用がみられる文献（明治期～昭和初期）

年代	「□□+愛」構成の語、及びその使用がみられる文献名
1919年以前	夫婦愛（『人情本・春情花の朧夜』1860頃） 人類愛（月の家『日月日記』天声社、1900） 無我愛（加藤弘之『学説乞丐袋』弘道館、1911） 祖国愛（文部省訳『独逸国民に告ぐ』帝国教育会、1917）
1920年～ 1929年	異性愛・同性愛（沢田順次郎『神秘なる同性愛』天下堂、1920） 同胞愛（新居格『左傾思潮』文泉堂書店、1921） 人間愛（米田庄太郎『恋愛と人間愛』弘文堂書店、1923） 隣人愛（生田長江訳『ツアラトゥストラ』新潮社、1924） 母性愛（鳥山朝夢訳『女子春秋』朝香屋書店、1924） 自己愛（長与善郎『竹沢先生と云ふ人』岩波書店、1925） 自然愛（斎藤清衛『国文学の序説：四大国文学者の批判』古今書院、1925）
1930年以降	師弟愛（本地正輝『先生！（師弟愛物語集）』三洋社、1930） 郷土愛（田沢義輔『青年団の使命』日本青年館、1930） 父性愛（岡本かの子『仏教読本』大東出版社、1934）

次の表2は、中国語の文献、及び国語辞典・新語辞典などに、「□□+恋」構成の語が収録されているものをまとめたものである。

表2：「□□+恋」構成の語の使用・収録がみられる文献・辞典類（民国期以降）

出版年	「□□+恋」構成の語	文献・辞典名
1929年	同性恋 異性恋 自我恋	潘光旦《馮小青——一件影恋之研究》（新月書店）
1946年	同性恋 異性恋 自動恋	潘光旦《性心理学》（商務印書館）
1993年	同性恋 黄昏恋 婚外恋	王均熙編《漢語新詞詞典》（漢語大詞典出版社）
1996年～ 2012年	同性恋 黄昏恋 婚外恋	中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編《現代漢語詞典》第3版～第6版（商務印書館）
1999年	彫像恋 画像恋 器物恋	劉達臨《性与中国文化》（人民出版社）
2006年	双性恋 忘年恋	王均熙編《新世紀 漢語新詞詞典》（漢語大詞典出版社）

これらの文献・辞典類に「□□+愛」構成の3字語は散見されなかった。中国語においては、1920年代末以降に「□□+恋」の構成語が多く造られたことがわかる。

このように、日本語では「愛」による構成語、一方、中国語では「恋」による構成語が多く造られたのは、日本語では「愛」に、中国語には「恋」にそれぞれ造語力があったからではないかと推測される。

## VI おわりに

本稿では、近代の日中語彙交流を視点において、日本語の「同性愛」と現代中国語の“同性恋”がどのように成立し定着したのか、またその要因を探ってみた。

日本語では、明治期末から大正初期に西洋から性科学の専門書などが数多く翻訳され、Homosexualität や Homosexuality などの訳語として、「同性の愛」や「同性恋愛」、「同性愛」が当てられ、1910年代はこれらの言葉が混用されていた。しかし、1910年代後半から、1920年代初めには、「同性愛」に書き改められた文献もあり、次第に「同性愛」に収斂されていく過程を読み取ることができた。

一方、中国語では、1920年以降《婦女雑誌》に日本文献の翻訳により、“同性恋愛”や“同性的愛”がもたらされ、民国期の小説や性の研究書などには、“同性愛”や“同性恋愛”が混用されていた。但し、社会学者である潘光旦の研究書には、1920年代末から、“同性恋”への書き換えもみられていた。文化大革命後の1980年代の《人民日報》には、海外の所謂同性愛の情報が“同性恋”で表され、特に、1985年に多くのエイズ関連の情報が伝えられた際には“同性恋”が屢々使用されるなど、次第に“同性恋”に収斂されるようになったものと推察される。

日本語では、1920年代に「□□+愛」構造の言葉が多くみられ、中国語では1920年代末以降に“□□+恋”構造の言葉が造られていた。日本語で「同性愛」が、現代中国語で“同性恋”が定着した背景には、日本語の「愛」と、中国語の“恋”にそれぞれ造語力があつたからではないかと推測される。詳細については、今後の課題としたい。

## 引用文献

- 1) 森林太郎.1909.「キタ・セクスアリス」『昂』第7号、7月、1-94ページ。
- 2) 森鷗外.1911.「青年」『昂』第3年第5号、5月、3-12ページ。
- 3) 1911.「恐るべき同性の愛 曾根岡村二令嬢の投身 女子教育界の一大問題」『読売新聞』7月31日。
- 4) 田中祐吉.1912.『男女の性欲研究』雅俗文庫。
- 5) 島中雄三.1911.「同性の恋と其实例」『婦女新聞』8月18日。
- 6) 中原青蕪.1911.「研究すべき同性愛」『読売新聞』11月5日。
- 7) 羽太鋭治・澤田順次郎.1915.『変態性欲論』春陽堂。
- 8) 内田魯庵.1911.「性欲研究の必要を論ず」『新公論』第26年第9号、9月、2-7ページ。
- 9) Krafft-Ebing, Richard.1903. *Psychopathia Sexualis*, Stuttgart. Verlag von Ferdinand Enke.  
黒沢良臣訳.1913.『変態性欲心理』大日本文明協会編、大日本文明協会事務所。

- 10) Ellis,Havelock.1901. *Sexual Inversion in Women Studies in the Psychology of Sex II*, Philadelphia F.A.Davis Company.  
野母訳.1914.「女性間の同性恋愛」『青鞥』第4巻第4号、4月、1-24ページ。
- 11) Carpenter,Edward.1912. *The Intermediate Sex*, London George Allen Co. Ltd.  
青山菊栄訳.1914.「中性論」『番紅花』5月号、5月、1-22ページ。
- 12) 雀部顕宜.1917.『女性の心理』北文社。
- 13) Carpenter,Edward.1912. *The Intermediate Sex*, London George Allen Co. Ltd.  
山川菊栄.1919.「同性愛」堺利彦・山川菊栄訳『女性中心と同性愛』アルス、165-256ページ。
- 14) 田中祐吉.1922.『人間の性的暗黒面』大阪屋号書店。
- 15) Carpenter,Edward.1912. *The Intermediate Sex*, London George Allen Co. Ltd.  
正声訳.1920.〈中性論 英国Edward Carpenter著〉《婦女雑誌》第6巻第8号、8月、1-14ページ。
- 16) 幼雄.1922.〈男性的女子和女性的男子〉《婦女雑誌》第8巻第2号、2月、61-63ページ。
- 17) 晏始.1923.〈男女的隔離与同性愛〉《婦女雑誌》第9巻第5号、5月、14-15ページ。
- 18) 張資平.1926.《飛絮》創造社出版部。
- 19) Carpenter,Edward.1911. *Love's Coming-of-Age*, New York & London Mitchell, Kennerley.  
樊仲雲訳.1927.《恋愛論》開明書店。
- 20) 茅盾.1927.〈幻滅〉《小説月報》第18巻第10号、10月、1-41ページ。
- 21) 浮海客.〈我之同性恋愛〉張競生編《性史》第2集、北京優種社出版、51-56ページ。  
小江平.〈我之同性恋愛〉、前掲《性史》、56-59ページ。
- 22) 潘光旦.1924.〈馮小青考〉《婦女雑誌》第10巻第11号、11月、1706-1717ページ。
- 23) 同上
- 24) 潘光旦.1929.《馮小青——一件影恋之研究》新月書店、1927年初版：1929年訂正再版。
- 25) 沈從文.1928.〈阿麗思中国遊記〉《新月月刊》第1号第3号、5月、1-68ページ。
- 26) Ellis,Havelock.1933. *Psychology of Sex A Manual for Students*, William Heinemann, Medical Books Ltd. London.  
潘光旦訳註.1946.《性心理学》商務印書館。
- 27) 張彦.1980.〈市長選挙与美国式民主〉《人民日報》3月13日。
- 28) 王飛.1981.〈美国保守主義的派別〉《人民日報》2月19日。
- 29) 楊貴蘭.1985.〈西方的獲得性免疫欠損綜合症〉《人民日報》3月1日。
- 30) 張充文.1985.〈愛滋病带来的社会問題〉《人民日報》9月17日。
- 31) 魯迅.1981.〈登龍術拾遺〉《魯迅全集》第5巻、人民文学出版社、274-276ページ。  
片山智行訳.1986.「登龍術拾遺」『魯迅全集』第7巻、小学館、308-310ページ。

- 32) 魯迅.1981.〈七論“文人相輕一兩傷”〉《魯迅全集》第6卷、人民文学出版社、403-407ページ。
- 今村与志雄訳.1986.「「文人は、互いに輕視しあう」こと、その七一兩方とも傷つく」『魯迅全集』第8卷、小学館、449-453ページ。

### 参考文献

- 荒川清秀. 2002.「日中漢語語基の比較」『国語学』第53巻第1号、4月、84-96ページ。
- 小田亮. 1996.『一語の辞典 性』三省堂。
- 風間孝・河口和也. 2010.『同性愛と異性愛』岩波書店。
- 菅野聡美. 2005.『〈変態〉の時代』講談社。
- 邱海濤. 2000. 納村公子訳『中国五千年性の文化史』集英社。
- 清地ゆき子. 2009.「恋愛用語「失恋」の成立と伝播の一考察」『中国文化』第67号、6月、31-38ページ。
- . 2010.「恋愛用語「三角関係」と“三角恋愛”の成立と定着—1920年代の日中語彙交流の視点から—」『日本語の研究』第6巻第2号、4月、46-61ページ。
- . 2011.「和語「恋人」の中国語での受容について」『中国文化』第69号、6月、49-56ページ。
- . 2012a.「張資平作品における「自由恋愛」—1910年代末から1920年代の知識人による言説を踏まえて—」『比較文学』第54巻、3月、94-108ページ。
- . 2012b.〈訳語“自由恋愛”の中国語での借用とその意味の変遷〉《日語学習と研究》第6期、総163号、12月、40-50ページ。
- 黒岩裕市. 2008.「“homosexual”の導入とその変容—森鷗外『新青年』」『論叢クィア』第1巻、57-75ページ。
- 斎藤光. 2000.「性科学・性教育編 解説」『編集復刻版 性と生殖の人権問題資料集成』第27巻、不二出版、巻末1-8ページ。
- . 2006.「『変態性欲心理』解説」斎藤光編『近代日本のセクシュアリティ 2 〈性〉をめぐる言説の変遷 変態性欲心理』ゆまに書房、巻末1-10ページ。
- 佐藤亨. 1999.「「愛」と「恋」とその類義語」『国語語彙の史的研究』おうふう、259-338ページ。
- 朱京偉. 2003.『近代日中新語の創出と交流-人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社。
- 白水紀子. 2002.「中国のセクシュアル・マイノリティー」『東アジア比較文化研究』第3号、6月、58-75ページ。
- 沈国威. 2008.『改訂新版 近代日中語彙交流史』笠間書院。

- 張競. 1993.『恋の中国文明史』筑摩書房。
- . 1995.『近代中国と『恋愛』の発見』岩波書店。
- 張競生他編・助言. 1999.土屋英明訳・解説『性史 第1集・第2集』イースト・プレス。
- 陳力衛. 2001.『和製漢語の成立とその展開』汲古書院。
- 土屋英明訳. 1990.『性史』東方書店。
- 訳. 1999.「解説」『性史 第一集・第二集』イースト・プレス、286ページ。
- 平石典子. 2012.『煩悶青年と女学生の文学誌 「西洋」を読み替えて』新曜社。
- 藤村作. 1922.「同性愛の文学」『上方文学と江戸文学』至文堂、189-222ページ。
- 古川誠. 1995.「同性「愛」考」『IMAGO』第6巻第12号、11月、201-207ページ。
- 前川直哉. 2010.「大正期における男性「同性愛」概念の受容過程—雑誌『変態性欲』の読者投稿から」『解放社会学研究』第24号、3月、14-34ページ。
- 松下貞三. 1982.『漢語「愛」とその複合語・思想からみた国語史』あぼろん社。
- 劉達臨. 2003.鈴木博訳『中国性愛文化』青土社。
- 方剛. 1995.《同性恋在中国》吉林人民出版社。
- 潘乃穆・潘乃和編. 2000.《潘光旦文集 第11卷》北京大学出版社。
- 劉達臨. 1999.《性与中国文化》人民出版社。
- 李銀河. 2009.《同性恋亚文化》内蒙古大学出版社。
- 施晔. 2008.《中国古代文学中的同性恋書写研究》上海人民出版社。